光輪

春彼岸号　第94号

〒950-2022 新潟市西区小針4丁目5番18号
真宗仏光寺派　瑞林寺　光輪会
電話　(025)266-1846
FAX　(025)266-1907
ホームページ　http://zuirinji.com/

みなさまどうぞお参り下さい

三月十八日（水）

春彼岸法要
無量寿廟法要
本山差向布教

お日中　十時三十分
お斎正午
お逮夜　一時十五分

布教使　滋賀県長浜市
善隆寺住職　和藏順人師

※月参り当日は休みます。
希望の方は前後にお参りしますのでご連絡ください。

老院の語る

親鸞聖人の越後
お念仏の歳時記⑱

聖人の越後七不思議

瑞林寺から車で10分、信濃川の平成大橋を渡ると①逆さ竹の鳥屋野西方寺様、橋の手前を右に折れて5分で黒崎の②山田焼鮒の田代家です。

また、七不思議に準ずる旧跡として鳥屋野の対岸、信濃川を渡る手前を左、平島（鮫面）に聖人の波切の御名号様を守り伝える鈴木（新十郎）家があります。小針は聖人と大変ご縁の深い土地柄で旧来土着の小針・平島・青山は一軒残らず真宗門徒の村でした。

ほかに安田の③三度栗の孝順寺様、小島の④数珠掛桜と⑤八つ房の梅の旧跡梅護寺様⑥田上のつなぎ榧（かや）の子玄寺様に上越市の⑦片葉の芦が親鸞聖人の越後七不思議の旧跡として、今日まで全国から門徒の人たちがお参りされます。

千年前の蒲原小針は

親鸞聖人は今から八〇五年前の承元元年（一二〇七）、朝廷の念仏弾圧によって越後に五年の刑の流罪となり、お師匠の法然様は四国に、ほかに伊豆や佐渡にまた首を切られる仲間の弟子たちもありました。

五年の刑のあと二年のあいだ鳥屋野や山田など蒲原の土地を念仏の教えを説いて歩かれ、そこから七不思議の伝説が生まれました。

当時の小針周辺の風景はどんなであったと皆さん想像されるでしょう。

越後でもっとも古く、平安の中期に画かれた康平絵図（一〇六〇）では、長岡、弥彦角田、東は新津丘陵を山並みとして蒲原平野は湾となり、その中に島々が点在、その一つに鳥屋野島も見えます。私たちの住む蒲原平野が信濃川と阿賀野川の運ぶ土砂によってできあがる、その原型を伝える絵図ともいわれます。

川の濁流が運ぶ土砂で砂丘が横に向かって次々にできあがってゆく。そのすそ野に人々が住みつき裏の砂山に畑を、前の川面の魚を捕り、稲作を始め、海水で塩作りもしたでしょう。

砂丘は亀田を中心に東西、西は西川町の升潟方面まで延びる亀田砂丘、次の沼垂砂丘は鳥屋野を通って小新の的場、緒立までつらなり、最後にできた砂丘が今の新潟海岸です。

砂丘、小高い丘を山といい、茅野山、松山、丸山、石山、姥ケ山など山のつく地名が亀田地区に多いのは、それが由来といわれます。小針でも今の住宅地となっている砂丘、砂山を山といい、転じて田畑の農作業に出かけることを「山に行く」と言いました。

平安時代、小新の的場（まとば）は越後の一大漁業基地

最近の発掘調査によって、小新の流通センターのある緒立には古墳時代からの生活の跡があり、的場は親鸞聖人が越後の蒲原を歩かれるずっと前の平安時代に、すでに鮭を捕り加工品や塩鮭を都に納める、越後国の漁業の一大基地であることがわかってきました。

それがいつの時代か、沈下陥没して消え、潟沼に変わってしまった。開発以前、小新には四つの潟があり、その一つが的場潟で、その潟を乾かし、埋め立てたのが今日の流通センターです。開発で地下に眠っていた遺跡がこの世に光を見たのです。

八〇〇年前の信濃川は、元、信濃川の本流ともいわれる信濃西川（現西川）と合流して平島から青山で日本海に注ぐ、今の関屋分水の流路が当時の姿でないかと思われます。今日の新潟島は小さな島が点在して、未だ海と川水が交わる内海、湾ではないか。

小新の的場や緒立は、西川や信濃川が海に注ぐ河口近くにあって越後の国津である蒲原津や、沼垂城に直近の漁業生産基地で、内水面の交通の要路としても人々の生活がみられました。

的場は瑞林寺から直線で2キロ、すでに越後の民衆が活発に行動していたのです。

淤泥華（おでいげ）

★鐘楼の脇にある百日紅（さるすべり）の枝が枯れかかっていて、現在治療中です。造園屋さんの話では、下の小さい竹の葉が生い茂りすぎて呼吸ができないとのことでした。

★この百日紅（さるすべり）は五十年位前、坂井の中沢角左衛門さんの寄進で、世話方の中沢均さんのお父さんが亡くなった時に自宅から寺へ移したそうです。

★当時まだ小学生だった均さんが、ずっとその木を見つめていたと老院が言ってました。お父さんの事を思いながら見つめていたのでしょうか。

★木々に魂は宿ると言いますが、なんとか枯れずにまた綺麗な百日紅（さるすべり）の花を咲かせてもらいたいと願います。

★小針中学の卒業式でPTA会長として祝辞を読み感慨深くなりました。3月は別れの月ですが、また出会いが始まります。亡くなっていかれた方々とも日々出会い続けているのでしょう。（住職）

春彼岸法話

法話　住職　廣澤　晃隆

三途の川の三途とは　三毒の煩悩

本堂の、阿弥陀さまの安置してある須弥壇や親鸞聖人や七高僧の雄掛け軸が飾ってある方をお内陣。皆さんが座ってお参りする所を外陣と呼びます。その境目の一段高くなっている所の金の金具が、波の形に鎚起してあるのをご覧になったことがあるでしょうか。

これは三途の川の波を表します。三途とは三毒の煩悩をあらわし、人の苦悩の原因でもあります。三毒とは、貪欲・瞋恚・愚痴をいいます。

貪欲…貪り
瞋恚…怒り
愚痴…無明・現実逃避

三途の川は火の川、水の川から成っており、火の川が瞋恚、水の川が貪欲をあらわします。その火の川、水の川が私の前に立ちはだかれば愚痴しか出てくる言葉はありません。その三毒の煩悩の中で、我々は日々まさに煩い悩んでいるのです。

火の川・水の川

三途の川を超えた所に極楽浄土があります。三途の川というと死んだ後に渡る川かと思いきや、日々、貪欲と瞋恚の荒れ狂う波の中を生きているということになります。本当にその川を渡りきるのは死ぬ時です。仏さまの国、西方極楽浄土へ参ることができるのです。

では、日々渡ろうとしている三途の川をどうやったら渡ることができるのか。そこが一番の問題です。

だいたい日常の中で、自分が煩い悩む根源が何かなんてことは考えたことがありません。せいぜい人のせいにしてみたり、世の中や社会、政治のせいにしてみたりするのが関の山です。それは確かに苦悩の縁にはなりますが、あくまでも外の縁で、根本的な原因にはなりません。外の縁をいくら何とかしてみても、最終的の根本的な原因は三つの毒である貪欲・瞋恚・愚痴に煩い悩まされ続けているのです。

お内仏に向かう習慣

荒れ狂う波を沈めることは、自分で到底できることではありません。怒り、腹立ち、憎しみ、妬みはまさにその煩悩の荒波であり、冷静さを取り戻すどころではないのです。人を責めるか、何かのせいにしなくては気がすまない。

外の原因はしっかり正すところは正さなければなりません。それを我慢して生きなさいというのが仏教ではありません。

ちなみに我慢も仏教では慢心の一つで煩悩になります。結局、我慢したとしても苦悩の原因になっていくのです。

貪欲・瞋恚・愚痴は自分ではなかなか自覚できません。自覚できたら怒りも妬みもおさまっていくはずだからです。ところが煩悩の波はいよいよ激しさを増すだけです。

その時、大事な事は、家であればお内仏（仏壇）に向かうことです。三途の川の向こう岸に手を合わすしかありません。向こう岸から私を見まもって下さる仏さまが呼びかけて下さるのです。「大丈夫だよ、ちゃんと私が見ているよ」と。

愛憎が違順する我が身

腹が立ったから手を合わすというより、日常の、日々の生活の中でお内仏に手を合わし、お正信偈を読む習慣があれば、なおさらその声は大きく私の心の内に響いてくるのです。お正信偈に、

貪愛瞋憎之雲霧
常覆真実信心天

とあります。

貪愛は貪欲、瞋憎は瞋恚、その貪欲と瞋恚が愛・憎を生み出します。愛と憎しみは違順すると親鸞聖人は教えてくださいます。つまり愛情が深ければ深いほど、ボタンのかけ違いで憎しみが深くなる。これだけ愛していたのに裏切られた時の憎しみは想像を絶します。

しかしそれは雲霧のようなものであって、真実を覆い隠しているだけのことです。その雲霧が逆に、本当の人としての真実の関係性を見つけさせようとしている。

天に太陽がいつもあるように、どんなことがあっても救うと誓われた阿弥陀如来さまが私を信じて見まもって下さっております。それを信じてお内仏に手を合わせることが、苦悩の根源を私に知らせてくださる仏さまからの一番の手立てであるのです。

瑞林寺 光輪会 春の一日バス研修旅行

越後七不思議と越後豪農めぐりの旅 第1弾

昨年の「親鸞となむの大地」展は盛況の中に終わりました。展示会は終わりましたけど、引き続き親鸞聖人の御遺徳を偲び、今年から三年間かけて越後七不思議を巡って行きたいと思います。

その第一弾として安田・水原方面の、もと北蒲原郡を中心に越後七不思議と、なむの大地が育んだ越後の豪農巡りを計画しました。

越後は日本でもトップの豪農が何軒もあります。そして当時は人口も日本一でした。そういう人たちが生きた越後の地に流れる精神生活を支えたのが親鸞聖人の念仏の教えであったのです。

今回は御老院がガイドとなって知られざる越後の歴史を語ります。どうぞご参加お待ち申し上げます。

★申込みは別紙の案内状の申込み書にてお願いします。

★出発日　５月１１日（月）
★参加費　一人　８，０００円　（昼食代含む）
★出　発　瑞林寺　午前８時半（午前８時本堂集合）
★締　切　４月末日まで　　定員３５名

研修行程

瑞林寺（8:00本堂集合 8:30出発）＝西方寺・逆さだけ・親鸞聖人草庵＝梅護寺・珠数掛け桜・八つ房の梅＝阿賀の里〈昼食〉＝孝順寺・三度栗＝五十嵐邸ガーデン＝水原・無為信寺＝天王・市島邸==瑞林寺（18：15）

聖人流罪の道を歩く　二十五日間の旅 ③

前田　隆夫

一日目、宿でスタッフにあずける荷物を渡し、全員で親鸞の草庵があったとされる東本願寺の岡崎別院に向かい本堂で出発式を行なう。

読経の後、仏光寺派の佐々木亮一宗務総長から激励を受け、最高齢八十歳の新潟市秋葉区から参加した佐藤千代衛さんが「親鸞聖人のご苦労をしのびながら完歩する」と仏前で宣誓し、三十六名が岡崎別院を出発する。ストレッチはどのような悪天候でも出発前とゴール到着後には必ず行う決まりになっており、その他リーダーの判断で適宜行うことに決められている。午前中は仏光寺、西本願寺、興正寺、東本願寺とめぐり、大谷本廟で昼食をとる。

大谷本廟を出るとまっすぐな急坂を山科の境まで一気に登る、午前中は長く伸びなかった列が一気に間延びし始める。山科の境を過ぎて下りに入っても街中の狭い道を下るため、信号や対向車をよけながらのためなかなか列は縮まらない。このため山科の駅前を超えた公園で小休止して隊列を整える。ここからは旧東海道を歩き山科の追分の手前で歩道橋で国道一号線にわたりトイレ休憩をする。

休憩後、今日最後の登りとなる逢坂登りにかかる。この坂ではかなり遅れ始める人が出始める、逢坂の関の碑が見えると京都府は終わり、滋賀県に入る。眼下に大津の市外と琵琶湖が見える。